

「お清めの塩」のお話



お葬式に行くと、よくこんなものを見かけるとはいますが、そもそも何のためにあるのかご存知ですか？



日本古来の慣習である「塩によるお清め」という行為は神道から来ており、「禍々しいものを払う」という意味合いもあります。神道では「死」そのものを「不浄なもの」と考えているので「塩」で身体を清めたり、神棚を穢さないために半紙を貼ったりするのです。



とくに昔は今と違い医学の知識も乏しかったので、今まで元気だった人が突然「心筋梗塞」や「脳卒中」などで倒れた時は「なにかの祟り」のような非科学的な現象として捉えられていました。衛生面においても現代のように上下水道も無かった時代ですし、「伝染病」でも流行しようものなら一つの集落全体に広がる危険も大きかったです。そうした背景もあって人々の中に「お清め」という行為が信じられたのかもしれませんが。
※貴重品だった塩の代わりに「味噌」が使われた地域も



ですが最近にきて仏教の「浄土真宗系」では「本来の宗旨」を考え、「お清めの塩」を使わないお葬式に変わってきております。



仏教と神道の「死」に対する考え方の違いです。「死」を「穢れ」とする神道に対し、仏教では「お釈迦様のいる浄土の世界にお生まれになる」と考えているのです。

とくに「浄土真宗系」では「誰でも浄土に行ける」と教えているのでなおさら「清める」という行為に対して否定的です。亡くなった自分の家族や親しい人に対して「塩をまく」というのは、故人を侮辱する行為だということです。



今までは日本古来の慣習として黙認されてきましたが、浄土真宗系の多い地域では「お清め」をしないう所が増えてきました。浄土真宗系のお葬式では、こうした事情をご理解頂きますようお願いいたします。